

## 源親行の和歌注解補遺

著者	中川 博夫
雑誌名	鶴見大学紀要. 第1部, 日本語・日本文学編
号	58
ページ	31-37
発行年	2021-03
URL	<a href="http://doi.org/10.24791/00000929">http://doi.org/10.24791/00000929</a>

# 源親行の和歌注解補遺

中川博夫

はじめに

『鶴見日本文学』第十八号（平二六・三）に掲載した「源親行の和歌注解」で、親行の和歌45首を取り上げた。そこで見落としていた和歌5首を取り上げ、注解を加えることとしたい。なお、便宜上、前稿の続きとして、見出し（節）の番号を「六」とするが、年次の順序で言えば、「四 東撰和歌六帖抜粹本」と「五 拾遺風体和歌集、隣女和歌集」との間に位置すべきものである。また、歌番号を④⑥～⑤⑩とするが、これも本来は④③～④⑦である。

## 六 宗尊親王弘長二年歌合二種

弘長二年（一二六二）に、恐らくは宗尊親王が主催したと思われる二種の歌合がある。国立歴史民俗博物館蔵『定家家隆両卿歌合并弘長歌合』（田中穰氏旧蔵典籍古文書H-743-50）に合冊されている（以下「歴博本」と略記）。これは、小川剛生が見出し、人間文化研究機構連携展示「うたのちから―和歌の時代史―」（平一七・一〇～一一）に展出され、その後、佐藤智広「宗尊親王弘長二年歌合二種について」（『昭和学院国語国文』三七、平二一・三）が、翻

刻紹介したものであり、その功績は小さくない。佐藤論では、内題「弘長歌合」のものをA、同「歌合 弘長二年三月十七日」のものをBとし、「両歌合とも弘長二年（一二六二）春のものであったと考えられる」と言い、他出文献の検証から、「宗尊親王主催の鎌倉での歌合であることは確実である」とし、弘長元年七月七日の『宗尊親王百五十番歌合』の「余波であるかのように、小規模な歌合が行われたと言うことであろうか」と言う。

Aの出詠者（左・右）は、宗尊親王（女房）・真観、藤原能清・北条時広、源時清・北条時遠、惟宗忠景・源親行、円勇・藤原（鎌田）行俊、素暹・公朝で、全一二名。歌題は、花・郭公・月・雪・恋の五題の全三十番（六番欠）である。Bの出詠者は、宗尊親王（女房）・真観、藤原能清・北条時広、源時清・北条時遠、円勇・藤原（鎌田）行俊、素暹・公朝で、全一〇名。Aの四つ目の番の惟宗忠景・源親行の番がBにはない。歌題は、月前花・霞中花・山路花・閑居花・河上花の五題で、全二十五番である。AとBは共に、勝負付けはあり、その一部に小字書き入れの注が付されているが、完全な判詞とは言えず、判者も不明である。

即ち、A『弘長歌合』で、親行は、四つ目の番の右方に「前河内守親行」として、左方「左衛門尉惟宗忠景」と番えられているのである。忠景は、忠綱男で、五郎左衛門尉と号する。仁治二年（一二四一）生、正安二年（二三〇〇）五月に、六十歳で没した。五位に補され、検非違使、常陸介に任じた。なお、杉本雅人『増訂 越前島津氏―その事歴と系譜「新装版」』（平二八・一二）が、「第五章 島津忠景―將軍家家臣として存在感を示した武家歌人」として、この忠景の閨歴と系譜上の位置づけを論じ、「忠景の詠歌」にも論及して、詠作を集成する。そこに、この『弘長歌合』の忠景と親行の計五番の本文が掲出されている。

この歌合の親行詠五首を、忠景詠を併せて見てみたいと思う。本文は、歴博本の写真版に拠り、右記の佐藤翻刻本文を参照する。（一）内の歌番号もその付番。「一」は虫損を示す。

④6 散り・散らぬ絶え間やいづこ白雲の八重立つ山の嶺の桜木（花・四番・八）

『堀河百首』の「花咲けば峰に八重立つ白雲の晴るる絶え間や散れるなるらん」（春・桜・一四七・国信）を本歌のように踏まえて、花盛りの景趣に詠み直す。その点では、主想は「白雲は四方の山辺にたなびきて絶え間も見えぬ花の盛りか」（久安百首・春・一一四・公能）に近い。あるいは、微かに「春の色の到り到らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ」（古今集・春下・九三・読人不知）が意識されているだろうか。初句の「散り散らぬ」は、為家の「散り散らぬ程をかたらん山桜まだ見ぬ人にをりはやつさじ」（為家千首・春・一二二）に学んだか。これは、「咲き咲かずよそにても見む山桜峰の白雲立ちな隠しそ」（後撰集・春・三八・読人不知）の「咲き咲かず」から発想したのかもしれない。

左の忠景詠「雲をだに誘ひな果てそ春の風散りなばなげの花の形見（に）」（七）が勝つ。これは、「うつろへば人の心ぞあともなき花の形見は峰の白雲」（新勅撰集・春下・一〇九・行能）に依拠したと思しい。「散りなばなげの」は、「いざ今日は春の山辺にまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは」（古今集・春下・九五・素性）の異伝「いざ今日は春の山辺にまどひな散りなばなげの花の蔭かは」（綺語抄・四四〇）に倣ったか。第二句の「誘ひな果てそ」は、宇都宮景綱の「鶴岳杜十首歌」詠に「ありて世ののちは憂くとも桜花誘ひな果てそ春の山風」（新和歌集・春・七五。続拾遺集・雑春・五一〇）があり、その他にも『新和歌集』に一首（雑秋・一六二・頼綱）、『東撰六帖抜粹本』に一首（冬・三七七・落葉・「」右衛門督）見え、関東圏に詠まれた句形と思しい。忠景の一首もその中にある。

④7 郭公涙借ればや老いが世の寢覚めの空に声の聞こゆる（郭公・十番・一八）

「声はして涙は見えぬ郭公我が衣手の漬つを借らなむ」（古今集・夏・一四九・読人不知）を本歌にして、「我が衣

手の漬つを借らなむ」を「涙借ればや」（私の涙を借りたので）と展開した趣であるが、全体の意図するところは分りにくい。「老いが世の寢覚めに」泣く私は涙を流し、同情した「郭公」も私の涙を借りて一緒に泣き鳴く声が空に聞こえる、という趣意であろうか。主想としては、例えば「聞きもあへず涙こぼれぬ時鳥老いの寢覚めの暁の声」（寂然法師集・春・三三二）に近いのであろう。宗尊の類詠「物思ふ寢覚めの空の郭公誰かまさるとなくぞ聞く」（瓊玉集・夏・一一八）との先後は不明で、為家の類詠「聞きてこそ涙は落つれ時鳥老いの寢覚めの夜半の明け方」（為家集・夏・文永元年四月十六日庚申郭公続三十首・四五九）は後出である。左の忠景詠に負けたのは、親行詠の不明明さが評価されなかったのであろうか。

その忠景詠「鳴けや鳴け早晩と頼めて時鳥五月もいまだつらなかるらん」（一七）は、「鳴けや鳴け高田の山の郭公この五月雨に声な惜しみそ」（拾遺集・夏・一一七・読人不知）を本歌にする。また、宗尊の「この頃をいつと定めて時鳥おのが五月もつれなかるらん」（宗尊親王三百首・夏・七九）にも倣ったのであろう。

④⑧雲払ふ嵐や松に残るらむ時雨れて澄める山の端の月（月・十六番・三〇）

歌境は、「雨後冬月といふ心を」を詠んだ「今はとて寝なましものを時雨れつる空とも見えず澄める月かな」（新古今集・冬・六〇〇・良暹）と同じであろう。親行も、この歌を意識はしていようか。「時雨れて澄める」は、時雨れてから後に澄んでいる、という意味に解してももちろん通意だが、時雨れているのに澄んでいる、という意味に解したい。それは、親行の意図が、「松」に吹き残る「嵐」の音が「時雨れて」いるように聞こえるとする趣向立てにあると見るからでる。その発想は、新古今時代の「時雨れゆく松の緑は空晴れて嵐に曇る峰の紅葉葉」（六百番歌合・冬・落葉・四九二・寂蓮）や「梢吹く嵐の音を時雨にて下紅葉する松もありけり」（正治初度百首・秋・三四六・守覚法親王）、あるいは「散りかかる峰の紅葉に染めかねて嵐は松の時雨なりけり」（正治後度百首・紅葉・一〇三八・

慈円）等に依拠していると思しい。

左の忠景詠「秋はなほ影澄みまざる月ぞとも涙落とさぬ人や見るらん」（二一九）が勝つ。その忠景詠は、「つれなくて涙落とさぬ人もあらじ心見がほに澄める月かな」（百首歌合建長八年・秋・五一四・家良）を踏まえていようか。この『百首歌合建長八年』は、將軍宗尊親王の手許にも在ったと推測され、この一首も宗尊は「荻の葉に風の音こそ聞こゆなれ涙落とさぬ人はあらじな」（瓊玉集・秋上・一五八）と撰取している。宗尊に近仕した忠景が、この歌合を披見し得たとしても不思議はない。参考、拙著『瓊玉和歌集新注』（平二六・一〇、青簡舎）、『竹風和歌抄新注 上・下』（金元・八・九、青簡舎）

④雪はなほふる野の小篠埋もれて枯れぬ緑も春や待つらん（雪・廿二番・四二）

底本は初句「ゆき花を」とある。雪を花に見立てたり喩えたりして言う「雪花」の語は、近世俳諧にはあるが、この時代の歌にはそぐわない。意改と見て「雪はなほ」に改める。初二句は、「雪はなほ降る」から、「ふる」を掛詞に、大和国の歌枕「布留野」「の小篠」へ鎖る。「冬草と見えし春野の小篠原弥生の雨に深緑なる」（堀河百首・春・春雨・一六七・仲実）や「春雨の布留野の小篠よよ経てもさらに緑の色まさりけり」（千五百番歌合・春三・三二一・有家）等が、親行の念頭にあったかもしれない。「枯れぬ緑」は、後代の正徹の「いかなれば磯の岩ほを越す浪にしほじむ苔の枯れぬ緑ぞ」（草根集・雑・岩上苔・九五九七）が目に入る程度の新奇な措辞で、雪の下に緑が春を待つかという意想も、南朝の花山院長親の「年暮れて雪の下なる松が枝も緑そふべき春や待つらん」（耕雲千首・冬・歳暮松・五九六）を見出だし得るにしても、新鮮ではある。

左の忠景詠「花の頃問はで過ぎにし憂き人の残る情けを雪に待つかな」（四一）とは持で、「何れも宜しくて」という小字の注がある。いわゆる宜しき持である。忠景詠は、春の花を訪問することなく行き過ぎた薄情な人の、せめて

残る情けを頼んで、冬の雪の景趣にその訪れを待つ、という趣旨である。「山里は雪降りつみて道もなし今日来む人をあはれとは見む」(拾遺集・冬・二五一・兼盛)を淵源として、「雪」に尋ね訪れる「人」を情けあると言う通念と類型が形成されている。あるいは、「子猷尋戴」の故事もそれに少し与っているかもしれない。「日数ふる雪踏み分けて問はばこそ人の情けも深しとは見め」(民部卿家歌合建久六年・深雪・一六五・有家)や「今朝の雪に情けなき名や残してん跡を惜しみて人を問はずは」「降る雪におのが情けを見せがほに冬の里問ふ小野の山人」(正治初度百首・冬・六六五・慈円、一九七一・二条院讃岐)等と詠まれるのである。忠景詠は、こういった通念と類型を踏まえている。「残る情け」は珍しい句形である。「花の頃」については、「大方の春によそなる宿なれば花の頃だに問ふ人はなし」(東撰六帖・春・桜・二〇四・基兼)が忠景の視野に入っていたであろう。

⑤⑥あらはれて袖にぞ余る思ひ塞く心のうちのたぎつ白波(恋・廿八番・五四)

「思ひ塞く心の内のたぎなれや落つとは見れど音の聞こえぬ」(古今集・雑上・九三〇・三条の町)を本歌にする。「たぎつ白波」は、『万葉集』以来の歌詞で、例えば定家には「今はただ我が身ひとつの思ひ河うたかたきえてたぎつ白波」(拾遺愚草・二八三二・壬二集・三一六〇)の作例がある。親行詠の「たぎつ白波」は、激しく流れ落ちる恋の涙の比喩である。「人目をばつつむと思ふに塞きかねて袖に余るは涙なりけり」(千載集・恋一・六九七・宗家。新勅撰集・恋一・六六四)や「恋衣袖の白波塞きかねて逢ふ瀬も知らぬ涙川かな」(正治初度百首・恋・一五七九・範光)が、親行に意識されていたかもしれない。

左の忠景詠「人目守る袖より外の袖もがな忍ぶ思ひの涙紋らん」(五三)が勝つ。忠景詠の上の三句は、『古今集』の「人目守る我かはあやな花薄などかほにいでて恋ひずしもあらむ」(恋一・五四九・読人不知)と、『後撰集』の「我ならぬ草葉も物は思ひけり袖より外に置ける白露」及び「大空におほふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせ

じ」(雑四・一二八一・忠国、春中・六四・読人不知)の、各句を組み合わせたような感じがある。結句の「涙絞らん」は新奇である。

以上、判は五番中、忠景詠の勝四番、持一番である。ここでは、親行の歌の評価は低い。忠景の歌が特に優れていて訳ではなく、総じて親行の歌が巧み過ぎていて、やや分かりにくくなっていることを反映しているようか。

## おわりに

親行の歌の特徴については、「源親行の和歌注解」を基に、「源親行の和歌の様相」(『これからの国文学研究のために——池田利夫追悼論集』平二六・一〇、笠間書院)に述べた。今回の補遺によって、その論を大きく改める必要はないと考えるが、細かな点については、別に補正を期したいと思う。